連載 木村俊昭の

第7回

「地域創生・SDGs【共創】実践」教室

～北海道を元気に！地域の宝物を掘り起こし、よく研け！～

独自の地域力を研く活力創発のまち（その1）
―北海道士別市―

―はじめに―

北海道はじめ、全国の地方都市等では、様々な問題点や課題を抱えており、日々、その解決に向けた努力と未来に向けての構想がなされている。私は、毎年１００か所程のまちを回り、首長や教育長、高等学校、主要企業団体や自治会等との対面対話を通じ、実感しているところである。そのひとつに、地方都市における急速な人口減少と高齢化の進行がある。過疎地域が急速に過疎化しつつある現場を見かける。近隣地域の中核都市部への若年層の流出や少子化。地域全体の人口構造の変化によって、生産年齢人口の減少と地域内の人手不足や消費購買力の低下などから、いかに地域経済の活性化や社会インフラの維持・補修を進めるかが課題となっている。また、多くの従業員を雇い、給料を支払い、税金を納めた、かつては地域の主力産業であった農業、漁業、林業や製造業等が全体的に衰退したことから、新たな産業の育成や地域資源の利活用が求められるも、地域人財の不足や技術力の低下等から想い描くほど進んではいない。

地方都市では、いまだに交通インフラが整備されていない地域も多く、交通アクセスの不便さもある。特に冬季の大雪や凍結などの影響で交通が制限され、地域創生・ＳＤＧｓの推進や観光振興等に影響を与えている。さらに地方都市と中核都市との間には格差があり、中核都市に産業やサービス、教育や医療等が集中しているため、地方都市から人財や経済の流出が起きており、その流れが一向に止まらない。早急に、この格差を縮小し、地域全体のバランスの取れた発展を目指す必要がある。

これらの問題点や課題を解決するためには、地域住民や行政、民間企業団体等がより強く連携し、「五感六育＋α」思考による全体最適な立体的ストーリー（脚本）政策の策定と役割分担、出番を明確にしての実践がますます重要となる。また、地域創生リーダー・プロデューサー人財の養成と定着が求められる。特に、よそのまちの物まねではなく、地域固有の特性や課題に応じ、最適な対策を講じていくことが重要といえよう。

―まちの紹介―

そのようななか、今回は、独自の地域力を研き、活力を創発している北海道士別市を取り上げることにしたい。士別市といえば、誰もが想い描くのは、ビートのかすなどの餌にこだわり、適度なサシと柔らかさ、羊独特の臭みもなく、40年来の歴史を誇る、地域ブランド羊肉「士別サフォークラム」や味付けジンギスカンであろう。また、うるち米の北限地域、天塩川のおいしい水、寒暖差を生かした冷涼栽培であろうか。その土地柄により、甘みが強く、もちもちとした食感が特徴の、ゆめぴりか・ななつぼし・おぼろづきなどの米の生産地・北海道産のパン用小麦として高い人気を得ている「春よ恋」の小麦粉や「うどん・そば」の乾麺のまちだ。最近は、トマトジュースが人気だが、寒暖差を生かしての栽培は、甘味の強さ、優しい味わいを出す独自のものとなっているようだ。

さて、士別市は、北海道北部の中央に位置し、道立自然公園「天塩岳」をはじめとする山々や北海道第２の「天塩川」の源流域を有する水と緑豊かな田園都市である。天塩川と剣淵川の合流点付近に位置しており、「大いなる川」を意味するアイヌ語、「シュペツ」から地名が付いたという。道立自然公園「天塩岳」をはじめとする山々を持ち、水と緑豊かなまち（人口１６、８０７人、８、８４２世帯：令和６（２０２４）年２月末日現在）。

ＪＲ宗谷本線、北海道縦貫自動車道をはじめ、国道や主要道道が接続するなど、交通網は良好な条件下にあり、道央圏の札幌市まで、車で約２時間半、ＪＲで約２時間の位置にある。行政面積は１、１１９・22平方キロメートル、そのうち約75％が山林のまちだ。

気候は、四季が明確な内陸性気候、５月頃から９月頃までは比較的高温多照だが、気温の日較差や年較差が大きく、11月頃から降り始める雪は、平地で１メートル、山間部で２メートルを超える、積雪寒冷な豪雪地帯でもある。人口は、昭和45（１９７０）年頃から、離農